

意象と現実

—— 宋代都市等級試論 ——

包 偉 民

(監訳：平田 茂樹 翻訳：樋口 能成)

◆ 解 題

本文章は包偉民「意象与現実：宋代城市等級芻議」(『史学月刊』2010年第1期、後に『宋代城市研究』(中華書局、2014年)第六章「人口意象」に収録)を翻訳したものである。包偉民氏は宋代財政史・経済史、江南地域社会史の領域において数々の優れた研究成果をあげており、現在は人民大学歴史学院教授である。『宋代城市研究』は宋代都市について全面的に論じた、現段階における最も優れた著作であり、この著書については穴沢彰子が『都市文化研究』18、2016年に書評を載せている。

(2018年8月31日論文受付、2018年11月9日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

はじめに

現在私達が中国古代都市の発展段階を考える際、重要な指標の一つとなるのが人口数である。都市人口が一定の規模に達する場合、一般的にその都市の経済的政治的地位を示してくれるのみならず、総合的な分析によって極めて重要な視点から当時の社会の発展段階を観察することもまた可能である。

宋代の都市人口数の研究が始まってから既に久しい。おおよそこれは二つの系統に分類でき、その一つは特定の都市の人口数を考察するもの、もう一つは総人口数における都市人口比率を総合的に考察するもので、前者の特定の都市(主に京城)の人口数の研究が比較的多い。早くも1930年代には、加藤繁が「南宋の首都臨安の戸数について」を発表しており、「……要するに、南宋末から元へかけて、臨安の戸数は三十万前後、人口は百五十万許と見做して大過無かるべく……」との見解を示している¹⁾。この後、少なからぬ研究者が北宋の京城開封と南宋の行在臨安の人口数の研究に力を注いだ。開封については天禧五年(1021)の城内外九廂の戸統計数の記録が残っており²⁾、都市住民のデータの分析は比較的容易である。1984年、呉涛は北宋後期の崇寧年間(1102~1106)までに開封の都市人口が140万に達したと計算した³⁾。この後も様々な研究によって人口数が計算されているものの、いずれも大きくは変わらない。周宝珠と呉

松弟の二人は共に150万前後⁴⁾、陳振は120万前後⁵⁾、久保田和男は仁宗朝で140万、北宋末で120万を下回るとしている⁶⁾。南宋臨安の都市人口の検討は比較的困難で、加藤繁の上記の見解の後、桑原隲蔵と池田静夫は500万人という推計値を提示したものの⁷⁾、多くの研究者からは支持されなかった。林正秋は、咸淳(1265~1274)末年における臨安の城区の人口を約43万とする⁸⁾。また趙岡は城廂合わせて約250万人とする⁹⁾。また沈冬梅は加藤繁の150万人という数字を支持し¹⁰⁾、呉松弟は南宋後期の臨安城内外の人口を120万前後とする¹¹⁾。ただいずれの見解もかなりあいまいな記述からどうにか計算して得られたものであり、推計としての側面は拭いがたい。また宋代の全人口に占める都市人口比率の算出については一層困難で、幾つかのおおよその推計はあるものの¹²⁾、どれも典拠を明らかにしておらず、あまり信用できるものではない。

この為、少なからぬ研究者は議論の方向を変え、宋代の都市分類に依拠しつつ様々な都市の人口数の概算を提示する様になった。そうした中で最も重要なのは梁庚堯が1980年代に発表した「南宋城市的發展」¹³⁾である。梁庚堯のこの研究は徹底した史料蒐集に基づいており、宋代の都市人口数についての現存史料を分析することで、当時の都市規模の等級区分についての見解、すなわち五万户以上の大都市を第一類、五千から五万户の二級都市を第二類、一千から五千戸の一般都市を第三類、最後に

一千戸以下の小都市、という分類を提示した。梁庚堯の分析はただ厳密な文献考証に基づくのみならず、都市人口の規模とその行政的地位及び経済的地位の関係にも注意が払われており、その研究は宋代の都市の発展レベルに対する私達の認識を深化させただけでなく、近年の幾つかの研究書においても主要な拠り所となっている¹⁴⁾。この他に韓光輝、呉松弟なども梁庚堯とよく似た見解を示している¹⁵⁾。すなわち、これまで様々なクラスの都市人口数についてはそれなりの推計が提示されてきたものの、全体の都市人口比率についてはよく分かっていないのである。

以上見て来た様に、長年の努力によって宋代の都市人口の研究は少なからぬ成果を上げてきたものの、一方でその困難も明らかになってきている。宋代の都市人口比率の問題に慎重な態度を取り続けている研究者達は、現存史料の分散と混乱、とりわけ少なからぬ史料の情報量の不足によって、統計手法を十分に究明することが難しく、その為にこうした史料の利用が事実上非常に困難である、と説明する¹⁶⁾。もしも実証的帰納的研究方法を遵守し続けるなら、恐らくは更なる発見は難しいだろう。よって本稿では視点を換え、宋代都市の実際の人口数ではなく、当時の文人のイメージに見られる都市規模認識について、すなわち本稿の言うところの「意象」について検討を行い、些少の進展を試みる事としたい。

ここで言う「意象」というのは、現存史料に見られる宋代の人々の都市規模を表す記述の事であり、一般に人口数で表される。この種の記述は全て実際の人口規模に基づいているというものでは決してないが、当時の人々にとってはある意味でより重要な要素、つまり都市の行政等級が含まれており、検討に値すると思われる。

一、京城

行政的地位から見ても、また実際の人口規模から見ても、中国歴代の京城は全て例外無く都市等級の序列の頂点であり、宋代においても例外ではない。

宋代の人々の京城に対する認識は、それが帝都であり、地位崇高で繁栄極まりないといった他は、その規模が巨大であって、「都城百万家、漠漠浮雲生」¹⁷⁾といったものである。およそ北宋建国時から、住民が「百万家」に達するというのは、ずっと文人によって描写されてきた京城の意象である。淳化二年(991)六月、太宗趙光義(在位 976-997)が汴河の堤防の決壊を受けて視察に出た際、臣下にその必要性を説明して次の様に言っている。「東京養甲兵数十万、居人百万家、天下輒漕仰給在此一渠水」¹⁸⁾。京城の民戸を百万とするのは当時既に一般的な認識だった。北宋の楊侃(字大雅)(965-1033)撰

『皇幾賦』には、京師への人口の集中への彼の解釈が示されており、「皇宋之受命也……是故七国之雄軍、諸侯之陪臣、随其王公、与其土民、小者十郡之衆、大者百州之人、莫不去其郷党、率彼宗親、尽徙家於上国、何懐土之不聞。甲第星羅、比屋鱗次、坊無広巷、市不通騎。」¹⁹⁾とある。すなわちこれは京城への人口集中の原因としてその政治的中心地としての側面を強調したものでしょう。この他にも例えば神宗の頃の程顥(1032-1085)の上奏には当時「京師の浮民」だけで「数は百万を逾ゆ」²⁰⁾とある。住民全てを合算すればその数は一層大きくなるだろう。また元豊元年(1078)九月、劉攽(1023-1089)撰「開封府南司判官題名記」には、「京師至三百万家」²¹⁾とある。また南宋初めの莊綽(字季裕)は「昔汴都数百万家、尽仰石炭、無一家燃薪者。」²²⁾と言っている。こうした意象には誇張の意味合いがより顕著に見て取れよう。

ところで「都城百万家」の意象は北宋開封に始まったものでは決してない。早くも唐代には詩文に描かれる京城長安はこうした宏大なイメージで形容されていた。例えば韓愈(768-824)は「長安百万家、出門無所之」²³⁾といい、元稹(779-831)の見る長安も「城中百万家、冤哀雜絲管」²⁴⁾というものであった。またやや後の賈島(779-843)も「長安百万家、家家張屏新」²⁵⁾という詩句を残している。こうした先人達の「壮大な京城」についての文化意象は宋代の文人にも継承されており、まさに「理に順いて章と成る」というものであろう。そこで宋代でも変わらず「更将夢逐殘紅去、遍入長安百万家」²⁶⁾と言われたりするるのである。あるいは更に時代を遡って「君不見咸陽百万家、長城白骨埋泥沙。」²⁷⁾というものもある。こうした意象は、宋代の京兆府(つまり漢、唐の長安)の実質がかつての長安としてのそれと全く変わってしまい、帝都らしきなど既に無いという事をまるで考慮していない。

これと同様に、宋代ではもう二つの都市が常に「百万家」の意象で語られていた。その一つは、嘗ての唐の東都で、宋代には西京が置かれた洛陽である。北宋の劉敞(1019-1068)はこれを「冠蓋百万家、車馬十二衢」²⁸⁾と形容している。もう一つは南宋の行在臨安である。楼鑰(1137-1213)の「糧料院葵向亭」という詩には「涛江渺莽三千頃、煙瓦參差百万家」²⁹⁾という句があり、程公許(?-1251)の「游靈隱寺」にもまた「京華百万家、舳舻瓦迭鱗」³⁰⁾とある。趙善括は臨安を長安になぞらえて「形勝視京兆、警蹕駐錢塘……幾百万家和氣、五十余年創見……」³¹⁾としており、これは完全に帝都の意象である。

ただ興味深い事に、宋代文人の文章にみえる洛陽と臨安の意象にはいわゆる帝都の意象と異なるところがある様に思われる。司馬光(1019-1086)は洛陽の春を描写して「紅緑陰中十万家」³²⁾というが、ここにみえる都

市の規模と前述の帝都の意象とは懸隔甚だしい。北宋後期の趙鼎臣はその詩で「壯哉洛陽都」と褒め称えるが、これに続くのは「城中十万家，古来豪侠窟」³³⁾という言葉でしかない。つまり北宋の洛陽は、西京が置かれているとはいえ、有り体に言えば一地方の中心都市でしかなく、実際は嘗てより大いに劣っている、という事が示されているのである。臨安についても、南宋の孫時時（1154-1206）の「風日都門外，樓臺十万家」³⁴⁾等の詩句は、恐らく、臨安は帝都であるとはいえ所詮は中原を追われたなれの果てで旧都には及ぶべくもない、といった印象を同時代人に与えたのではないだろうか。南宋滅亡後の臨安は更に零落し、長雨が続いた頃には「旧畿十万家，大半憂為魚」³⁵⁾と詩人が憂えており、その有様がより一層想像される。

「都城百万家」というのは当然ながら事実そのものではなく、北宋開封の人口は前期こそ百万に僅かに及ばず、後期には更に増加したが、全戸数で三十万を超えることはなかったというのが概ね定説となっている³⁶⁾。南宋臨安府の人口についてはまだ定説が無いが、私が計算したところでは、例え南宋後期であっても人口が百万を超える事は無く、全戸数で二十万戸程に過ぎなかったと思われる³⁷⁾。

つまり「都城百万戸」というのは一種の文人の意象なのであり、京城の至上の行政的地位を反映したものである。

二、地域中心都市

宋は唐の制度を継承して京城の下に州・県を置いた。またそれとは別に全国におよそ22の監察区、すなわち路を置き、路の最高位の行政機構は監司とよばれた。北宋から南宋にかけて監司の行政管轄権が強化されてくると、路もそれに踵を接するように行政区画化していった。この為には研究者の中には路を地方行政区画と考える者もいる。また歴史的要因や、「山川形便」といった地理的要因から、路域は単なる区画というよりも、内部に明らかな共通性を有した一個の比較的独立した経済・文化区域を形成する事が多く、転運使や安撫使などの治所が置かれる「路治都市」は、一般的にどれもその地域の中心都市であった。これは宋代の人々の都市規模に関する意象からも明確に裏付けられる。すなわち「都城百万戸」の下には居民「十万家」と記される都市があり、その多くがこうした「路治都市」なのである。

既に触れた「城中十万家」の北宋洛陽は京西北路の路治であり、政治・経済上の特殊な地位は疑い様も無い。この洛陽から西北の方角にある秦鳳路の儀州は、梅堯臣（1002-1060）「寄題知儀州太保蒲中書齋」の詩に「中

条挿遠近，黄河瀉直斜，蒲坂之城在其涯，渠渠碧瓦十万家。」³⁸⁾とうたわれる。儀州（今の甘肅省平涼市華亭県）は路治ではなく、また経済的に発展していたわけでもなかったから、当然ながら人口はそれほど多くなかった。梅堯臣は京城から遠く離れた友人へ詩を送って「渠渠碧瓦十万家」とうたうが、これは当然ながら事実を描写したのではない。これは要職に就き著名な州を治めている事を讃える他に、儀州が対西夏戦線の最前線で軍事的要地にあるという特別な重要性を有する事をも示しているのである。つまり梅堯臣の誇張した意象もまた道理に適ったものであると言えよう。

その他の多くは南方に集中する。北宋中期の鄭獬（1022-1072）の「荊江大雪」という詩は、荊州（今の湖北省荊州市）を「天工闢巧變物境，玉作荊州十万家」³⁹⁾という。荊州は後の江陵府で、北宋より安撫使の治所が置かれ、荊湖北路の重要都市であった。当時常に「十万家」と形容されていたわけではないが⁴⁰⁾、ただここが「十万家」の地域中心都市として名実共に備わっていたことは間違いない。南宋になるとここは大軍の駐屯地となってより重要さを増していくことになる。この他、洪州（今の江西省南昌市）には江南西路転運司と安撫司の治所があり、江西地域の中心都市であった。夏竦（985-1051）「滕王閣」には「面臨漳水勢凌霞，却倚重城十万家」⁴¹⁾とあるが、実際の戸数は決して十万家には至らなかったと推測される。またこの他にも梓州には潼川府路安撫司、提点刑獄司の治所が置かれる一方、都市の規模はそれほど大きくなかったと思われ、文同（1018-1079）の「送馮允南倅梓」という詩には「梓州城中十万家，家家尽喜見君面」⁴²⁾とある。

同じ時期に記述が比較的多いものに、越州、杭州、蘇州がある。治平元年（1064）、毛維瞻が越州の事を撰録した『新修城記』には「越為浙東大府，戸口之衆寡，無慮十百万。金穀布幣，歲入于官帑庾，数又倍之。」⁴³⁾とある。『新修城記』は事実の記録という体裁だが、戸口を「十百万」というところなどは典型的なイメージ重視の語句であり、難しいところである。これにやや遅れて、程俱（1078-1144）「越州置酒暮夜乃婦作詩一首」には、「遥岑出西南，杳藹川原平，城中十万家，煙雲隱飛甍。」⁴⁴⁾とかなり明確に書かれている。越州には両浙路提点刑獄司の治所があり、また両浙転運司が二個所に置かれていた頃には両浙東路転運司の治所があった⁴⁵⁾。秦漢以来の「浙東大府」であり、宋代に杭州に抜かれてからは二番手に甘んじはしたが、政治的にも経済的にも浙東の中心都市としての地位は変わらず、それは南宋に至っても同様であった。

隋代に江南運河が開通してから杭州は飛躍的な発展をみせ、唐中期以降は「東南名郡」⁴⁶⁾と呼ばれて、両浙地域の中心都市となっていた。宋代、杭州にはずっと両

浙路転運使の治所が置かれていたが、南宋には行在ともなっており、全国の政治、経済の中心となった。北宋嘉祐四年（1059）の歐陽脩（1007-1072）「有美堂記」には「錢塘……其俗習工巧，邑屋華麗，蓋十余万家」⁴⁷⁾とある。これは事実に基づいた記述であり、杭州の都市人口の実際の状況と符合する。すなわち、咸平二年（999）、知杭州となった張詠（946-1015）は、ここで発生した飢饉の様子を朝廷に上奏して、「余杭十万户，飢者七八」⁴⁸⁾という。更に九十年後の元祐五年（1090）、知杭州の蘇軾（1037-1101）はここで災害に遭い、その際の転運使の賑災対応が公平に欠けていると朝廷に訴えて「窃縁杭州城内生齒不可勝数，約計四五十万人」⁴⁹⁾というから、すなわち約十万户だったことが分かる。こうした史料はいずれも北宋杭州の実際の都市人口が十万户前後であった事を裏付けるが、ただ宋代人の詩詞には意外にも人口数の誇張表現が見られないということにもなる。趙汴（1008-1084）の「次韻歲暮有感」という詩には「春元便欲休官去，誰顧杭州十万家」⁵⁰⁾という句があり、また蘇軾の「病后醉中」という詩には「堪笑錢塘十万户，官家付与老書生」⁵¹⁾と自嘲する句がある。北宋末の郭祥正「錢塘行送別簽判李太博（献甫）」という詩も同じく錢塘城を「門前碧瓦十万户，曉色滿城煙雨香」⁵²⁾という。こうした宋代人の詩詞から、杭州の様な地域中心都市では都市住民が十万户というのが一般的で「標準」の意象だったと言えよう。だから南宋になって杭州（臨安）の都市人口が明らかに十万户を超えようとも、詩人は「十万户」という言葉でこれを表現したのである。

杭州と状況がよく似たものに蘇州（平江府）がある。宋代蘇州の政治的地位は杭州に及ばなかったが、長く浙西路提点刑獄司と提挙常平司の治所が置かれ、経済的地位では杭州に引けを取らなかった。孫觀（1081-1169）は「平江自唐白公為刺史時，即事賦詩，已有八門六十坊三百橋十万户，為東南之冠。……蓋自長慶訖宣和，更七代三百年，吳人老死不見兵革，覆露生養，至四十三万家。」⁵³⁾と記すが、これに従って当時の蘇州の都市人口を「至四十三万家」とするのはもちろん誇張に過ぎるというものである。ただ北宋末には十万户を超えていた可能性はあり、南宋では更に増加したと思われる⁵⁴⁾。しかし当時の詩からは、蘇州の都市人口が十万户を超えていた様にはみえない。例えば范仲淹（989-1052）の「虎丘山」には「吳都十万户，煙瓦亘西南。」⁵⁵⁾とあり、またやや後の王洋（1087-1154）「僧求詩往平江」には「自古吳門十万户，莫疑開口告人難」⁵⁶⁾とより明確に記されている。また趙蕃（1143-1229）の「平江尋吳恭叔不獲」には「城中十万户，歷問無乃勞」⁵⁷⁾とある。こうした詩文の表現は都市人口の実状ではなく、あるレベルの都市に対する当時の人々の一般的意象に過ぎない。

この他にも幾つか事例はあるが、主に南宋の頃の状況

を反映したものである。幾つか見てみよう。

まず成都是、言うまでもなく四川地域の中心都市で、陸游（1125-1210）はここを「九衢百万家」⁵⁸⁾とまで言うが、もちろんこれは成都の四川における揺るぎない特別な地位を強調した表現である。ほぼ同時期の陸游の別の詩では「城中繁雄十万户，朱門甲第何崢嶸」⁵⁹⁾とあり、ここで成都是路中心都市の地位に戻されてしまっている。

鄂州（今の湖北省武漢市）は荆湖北路転運司と安撫司の治所があり、荆湖地区の最重要都市である。南宋の姜夔の「春日書懷」には「武昌十万家，落日紫煙低」⁶⁰⁾とある。また戴復古（1167-1252?）の「鄂州南樓」には「江渚鱗差十万家，淮楚荆湖一都会」⁶¹⁾とある。但し現在の研究では鄂州の人口は十万户には遠く及ばなかったと推定されている。

襄陽（今の湖北省襄樊市）は、京西南路の南端にあり荆湖北路に隣接する。北宋の頃は人口密度も低く、都市の規模も大きくはなかった。しかし南宋では金との最前線となり、大軍が駐屯した。この為に「城中十万家，碧瓦生煙霧」⁶²⁾といった重要都市と認識されたのである。

潭州（今の湖南省長沙市）は、荆湖南路転運司と安撫司の治所があり、湖南地区の中心都市である。北宋の宋祁（998-1061）は「渡湘江」という詩で「長沙十万户，游女似京都」⁶³⁾と讃えており、ここが湖南第一の都会で、同時代人の感覚としてその地位が高かったことが窺える。南宋初めには李綱（1083-1140）が昔日の潭州を回顧して、「昔年假道過長沙，煙雨濛濛十万家，棟宇只今皆瓦礫，生靈多少委泥沙。」⁶⁴⁾と感慨にふけている。潭州の実際の戸数は、北宋の包拯（999-1062）によれば「在城数万家」⁶⁵⁾とあり、また南宋でも梁庚堯の計算によれば二万户は超えなかったというから⁶⁶⁾、文人の詩文にみえる意象とは大きな差があったのである。

鎮江府は北宋では突出した都市ではなかったが、南宋になると長江防衛の要となり、建炎四年（1130）には沿江安撫大使司が置かれ、また両浙西路提点刑獄司の治所も置かれた。実際の都市人口は一万户から二万户の間と見積もられているが⁶⁷⁾、当時の詩文には「鉄甕城中十万家，哀絃促管競繁華」⁶⁸⁾とあって、中心都市と思われていた事が分かる。

福州は、土地が狭く都市が小さいため、「万家城」などといった語句で表現される事はほとんどない⁶⁹⁾。しかし福州は福建路の大都市で、福建路安撫司の治所があるので、「十万家」の地位を失ってはいない。黄榦（1152-1221）の「游鼓山登大頂峰」には「城中十万家，鬪雜不到耳」の句がある⁷⁰⁾。

詩とは自由なものであるから、詩人が都市の規模について描写する際、そこに厳格な区別や規定を求める事はできず、例外は避けられない。例えば陸游が成都是「九衢百万家」といったのと同様に、楊万里（1127-1206）

が彼の故郷の吉州を「闔閭数十万家，如在井底」⁷¹⁾ といひ、汪藻（1079-1154）が福州長楽県を「重城十万家」⁷²⁾ というのは、皆な極度の誇張なのである。この時、こうした州軍と路府の両方の性質を備えた都市は詩人の意図によって「意象」が揺らぐ、という事もまた理解できよう。しかしながらこれまで引用してきた史料に見られる一般的な傾向も相当に明らかであろうと思われる。

三、州県都市

地域中心都市の下には州県都市がある。この種の都市の規模の実状は最も複雑で、よって文人士大夫達の表現も多様を極める。しかし注意深く観察すれば、ある種の法則を見いだす事ができる。例えば一般的な州軍の都市の規模であれば「万戸」が使われる事が多く、比較的大きければ「数万戸」、或いはやや劣る様であれば「幾万戸」といった様に、万戸を基準に上下するのである。

唐代の詩において「万戸」と表現される都市は少なくない。例えば晩唐の李頻（818-976）は宣州の情景を「万家閭井俱安寝，千里農桑竟起耕」⁷³⁾ と詠んでいる。ただ宋代になるとこうした意象はより明確になる。およそ熙寧元年（1068）の少し前、劉敞（1019-1068）が濠州の母舅に宛てた詩には「貴為千騎長，富有万家居」⁷⁴⁾ とある。また既に見た様に梅堯臣は友人を讃えるために儀州の規模を誇張していたが、それから数十年後、范純仁（1027-1101）は「題河中府名閨堂」という詩で儀州を一般州軍の地位にまで引き戻し、「誰擘中条太華開，万家填郭聳樓臺」⁷⁵⁾ といっている。南宋初め、晁公遯が四川の彭州の黎某に宛てた手紙は、黎某の「ご尊顔を瞻奉」した事が無いからという理由でたくさんの社交辞令で飾られるが、とりわけ黎某の能力を褒めそやしたところには「劍西蓋多才矣，雖未瞻奉，已知其出于名国万家之城，必非生于三家市者比也。」⁷⁶⁾ とある。注意すべきは「必非生于三家市者比也」という語句で、これは黎某がかなりの規模の名邑の出身である事を強調した言い回しであり、すなわち詩文中の意象と同様のものである。この他にも常州は「列屋万家当舟車之孔道，環地千里亦輦轂之輔藩。」⁷⁷⁾ と記され、台州は「頃年登臨赤城裏，江繞城中万家市。」⁷⁸⁾ と楼鑰によって描写されている。また南宋後期の嘉興府が「東南方輿区」と讃えられたのは、ここが「民物稍蕃庶，煙火万家」⁷⁹⁾ だったからである。

州軍都市のこうした「万家之城」の意象は、宋代を通じて変わらなかった様である。一方で人口が「万家」に到らない都市については、文人がその小ささを明確に示すこともよくある。例えば北宋の王禹偁（954-1001）は商州を「居人且艱食，行商不通貨。郡小数千家，今夕唯

愁呵。」⁸⁰⁾ と記す。王禹偁によれば「数千家」は明らかに小郡であった。同じく、南宋の黄榦は知漢陽軍となった際にその地を「其為郡最小，事權最輕」と言ったが、これも「郭内之民僅千家」というのが理由だった⁸¹⁾。更には辺境の昌州が「郡云云，其民纔千百家」⁸²⁾ とされるのは、規模が特に小さい事を示す為である。つまり「雲屋万家」の州邑こそが「楽地」と称されるに足るものだったと言えよう⁸³⁾。

こうした小州の都市の場合と違って、当時の人が某県城の重要性を誇ったり、或いは某県城の規模が比較的大きい印象を持つ場合は「万家居」等といった語句で表現された。北宋の神宗の頃、劉放が賈延平の知光化県就任を賀して贈った詩には「曾為都尉治，今亦万家居」⁸⁴⁾ とある。そこが重要な都市だからこそ、その長官になった友人の非凡さが可視化されるのである。同じく、南宋の李流謙が成都府郫県を讃えて「子男古所尊，而此万家居」⁸⁵⁾ と言うのも、友人がここの知県に就任した事を祝賀する為である。南宋初め、王洋が弋陽城の真意堂を詠んだ詩の「弋陽千万家，比屋接修棟」という住居がひしめき合っている様を誇張した描写は、主人の住居が「三間良足用」でありながら「積錢寬買園」という行いの風雅さを自ずから際立たせている⁸⁶⁾。南宋の范浚（1102-1150）は書を県官に送って地方の政務の煩雑さを述べる中で「蘭溪地雖小，亦万家居也」⁸⁷⁾ と言う。また林亦之（1136-1185）が福清県を「螺紋江頭乃万家之繁市，龜山塔下有百年之精廬」⁸⁸⁾ と描写し、劉子翬（1101-1147）が東陽県を「小箔鳴機幾万家，時清猶想旧繁華」⁸⁹⁾ と讃えるのは、その地域の経済発展や都市の繁栄を直に誇ったものである。

以上から一般県邑の規模は万家に満たないと当時考えられていたと推測されるが、これは史料によっても裏付けられる。北宋の蘇轍（1039-1112）は績溪県城を讃えて「南看城市北看山，每到令人意豁然。碧瓦千家新過雨，青松万壑正生煙。」⁹⁰⁾ と言うが、ここで県城の規模を示すのは「碧瓦千家」である。また南宋の葉適（1150-1223）の「漳浦県聖祖殿記」には「漳浦五千戸，良山蔽其西南」⁹¹⁾ とある。恐らく千家から数千家というのが宋代の人々の意象としての県邑の規模だったのだろう。しかし県城は都市の行政等級の中では最低ランクであり、千家の邑とは間違いなく小都市であった。王安石（1021-1086）は「寄沈道原」という詩で揚州蜀岡県を「城郭千家一彈丸」⁹²⁾ といい、韓元吉（1118-1187）は「送趙任卿蕪湖丞」で当塗県を「孤城千家邑」⁹³⁾ といっており、つまり繁栄した万家の邑でもない一般の県城の印象は「とても小さい」というものだったのである。

最後に鎮市についても述べておこう。宋代の鎮市は未だ独立した地方行政区画ではなかったが、幾つかの鎮市には兵卒が駐屯し鎮官が置かれており、これによって相

応の治安維持や商税など賦税徴収の管理圏が存在した。ほとんどの鎮市は普通の農村聚落で、農業従事者が住民の大多数を占めており、恐らくは「都市」と呼ぶには相応しくなかっただろう。商業が盛んで非農業人口が多数を占めていた鎮市も幾つかはあり、そうした鎮市のみがどうか都市と呼べる程度であった。学界はずっとこの区別に無頓着だったが、そろそろ過ちを認めるべきだろう⁹⁴⁾。南宋後期の定海県鮑塘鎮では「居民環鎮者数千家」⁹⁵⁾だったというが、19世紀後期に至ってもこの一帯の鎮市の住民はなおも「業農者多、経商者少」⁹⁶⁾という状態だった。これをもって嘗て筆者は人口が城鎮よりも郷村に多く属するという「鄞県モデル」を導いており、このモデルは一定の普遍的意義を持つと考えている⁹⁷⁾。南宋では既にこうした情景はより一般的だったはずで、福州の海口鎮が「居民余二千戸」⁹⁸⁾とあり、湖南の橋口鎮が「市戸二千余戸」⁹⁹⁾とあるのは、全てこうした情景に属するものと思われる。ほとんどの鎮市では、薛季宣(1134-1173)が南宋中期の鄂州金牛鎮を「人煙近四百戸、市井比之本県大段翁集」¹⁰⁰⁾と描写する様に、数百戸の人煙があれば商業活動が県城を超過しているとされたのであり、いわゆる「墟市数百家」というのはまさに繁栄する鎮市の一般的な情景なのである¹⁰¹⁾。

しかし総じて言えば、宋代の鎮市経済の発展が新たな段階に到達していたという事は無視できない。少なからぬ商業鎮市の人口規模は確かに前代を遥かに超越していたのであり、そこで文人の詩文には「千家市」といった様な典型的な意象が生み出されたのである。前述の「人煙近四百戸」の鄂州金牛鎮は、やや後の地方志では「民旅翕聚、亦千家市也」¹⁰²⁾と記される。この「千家市」のイメージは明らかに事実ではなく、類型化された意象である。また劉宰が真州沙頭市を讃えて「沙頭縹渺千家市、鱸尾連翩万斛舟。」¹⁰³⁾と詠んだのも明らかな誇張である。また邵武軍邵武県楊坊鎮は謝枋得(1226-1289)による記述があり、「楊坊千家市、習俗以市道相尚、以詩書名家者、皆異邦人。」¹⁰⁴⁾とある。その習俗の市道を尊び儒術を軽んじる様を強調するもので、「千家市」云々というのはその商業経済の発展の際立った様を表す文言である。また荆門軍長林県について、南宋の周紫芝(1082-1155)が「忽從岡阜間、稍得千家市」¹⁰⁵⁾というその「千家市」も写実的表現でない事が知られよう。

一般的な州軍都市から鎮市に至るまで、宋代の人々のイメージを映し出した詩文における都市の描写は様々だが、その意象が反映する都市の分類は思いのほか明確だと言えるのである。

おわりに

これまで述べてきた宋代の人々(主に文人士大夫だが)は、その文筆下に様々な行政クラスの都市に応じて「一般化」した都市意象を形成しており、これについてイメージと現実の二つの側面から解読が可能であると思われる。

いわゆるイメージの側面については、古代の都市は長い間行政の中心として人々のイメージに特に深い印象を残していた為、都市の発展が一律でなく、同じ行政クラスの都市の実際の規模にかなり大きな差異が生じていたにもかかわらず、人々の意象においてはなおもそれを同一類型とする事が習慣化していた、と言える。既に見た杭州や蘇州の事例では、文人は「錢塘十万户」「吳門十万户」と観念的な表現でこれを称揚していたが、時期によっては実際の人口規模の方が大きいという「誇張の逆転」が現れていた、というのもこの典型だろう。その一方で、都市の行政レベルに比べて意象の規模が遥かに現実を超えており、詩文において頗る誇張された描写を施されている事例も多く見られる。もちろん十万户、万户、或いは千家市といった典型的な意象はいずれもこの類である。いわゆる現実の側面において、杭州や蘇州などの事例や、また同一クラスの州県都市の規模にかなり明確な開きのある事例も見られたが、しかし全体としては異なる行政クラスの都市のその実際の人口規模と当時の人々の意象は概ね対応していたと言えよう。だからどの面から論じるにせよ、行政クラスは依然として都市の地位の決定的な要因なのだと理解できるのである。或いは少し角度を変えて、当時の行政都市の等級構造とその経済的地位は全体的には一致していたとも言えるだろう。唐宋間の都市の発展は、一部においては都市の行政的地位と経済的地位のずれとして現れただろうが、しかしながら都市の行政と経済の関係の全体的な構造を変化させるには至らなかったのである。

この他、百万戸、十万户、万户、千家市といった都市人口規模の類型化された概念の形成からは、宋代の人々の意象における都市の規模が確実に前代よりも拡大していた事が分かる。これは或いは唐宋間の都市の発展という客観的な現実が人々の観念にある程度影響していたという事なのかもしれない。ただ宋代以前の都市意象の研究にはまだ不足がある点を鑑みれば、私のこの「感覚」はまだまだ表面的なものでしかないだろう。識者の批評を待ちたいと思う。

注

(訳者注：以下注釈は、訳者によって可能な限り校訂した。なお訳者の環境の制限の為に確認が取れなかったものについては、包偉民2014『宋代城市研究』第6章 人口意象を参照し、代替するものは代替した。またこれも訳者の環境の制限の為に、webサイト「中

国哲学書電子化計画」(https://ctext.org/library.pl?if=gb) 掲載の史料によって校訂したものもある。

1. 初出は『社会経済史学』3-8 (1933年11月, 日本)。後に加藤繁『支那経済史考證』下巻所収(呉傑訳『中国経済史考証』商務印書館 1959年 844頁)。加藤繁は後に「臨安戸口追論」を発表し、旧説を改めて述べている。この論文もまた『支那経済史考證』下巻に採録されている。
2. 徐松輯『宋会要輯稿』兵 3-3 (中華書局影印本)。『全宋文』第13冊(上海辭書出版社・安徽教育出版社 2006年版) 114~115頁を参照
3. 呉涛『北宋都城東京』河南人民出版社 1984年版, 37頁
4. 周宝珠『宋代東京研究』河南大学出版社 1992年版, 345~349頁。葛劍雄主編・呉松弟著『中国人口史』第3巻(遼宋金元時期), 復旦大学出版社 2000年版, 574頁
5. 陳振「十一世紀前後の開封」『中州学刊』1982年第1期
6. 久保田和男「宋都開封の人口数についての一試論—在京禁軍数の推移を手掛かりとして」『東洋学報』82-2, 2000年
7. 注1 加藤繁「臨安戸口追論」を参照
8. 林正秋「南宋都城臨安人口数考索」『杭州大学学报』(哲学社会科学版) 1979年1・2期合併号
9. 趙岡「南宋臨安人口」『中国歴史地理論叢』1994年第2期
10. 沈冬梅「宋代杭州人口考辨」漆侠主編『宋史研究論文集—國際宋史検討會暨中国宋史研究会第九届年會編刊』河北大学出版社 2002年版
11. 呉松弟『中国人口史』第3巻(遼宋金元時期), 復旦大学出版社 2000年版, 584頁
12. William Skinner, *The City in Late Imperial China*, Stanford University Press, 1977. 葉光庭等訳『中華帝国晩期的都市』中華書局 2000年版。Skinnerの「導言：中華帝國的都市發展」の29頁には次の様にある。「より広範で詳細な証拠が示す様に、この地域の13世紀の都市化比率は少なく見積もっても10%か或いはそれ以上かもしれない。」斯波義信は、南宋最盛期の「都市化率は或いは30%に達しただろう」とする(斯波義信『宋代江南經濟史の研究』汲古書院 1988年版, 方健・何忠礼等訳, 江蘇人民出版社 2001年版, 329頁)。また趙岡「從宏視角度看中国的城市史」(『歴史研究』1993年第1期)も南宋期の都市人口比率が22%に達したとする。
(訳者注：Skinner “Introduction: Urban Development in Imperial China” p 28: “This last generalization may appear paradoxical, but the evidence points strongly in that direction, and a secular decline is by no means implausible. The estimates presented in my paper below indicate an urbanization rate for the Lower Yangtze, the most urbanized region, of less than 8 percent in the 1840’s. Rather extensive circumstantial evidence for the same region as of the thirteenth century suggests a rate of at least 10 percent and probably a good deal more. ……」)「最後の概括は矛盾する様に見えるだろうが、資料はこうした傾向を強く示しているし、また長期的な衰退というのはあり得ない話ではない。詳細は後述するが、長江下流域、つまり最も都市化が進んだ地域の都市化率は1840年代で8%以下だった。ところがこの地域のより多くの資料、例えば13世紀のそれには都市化率が少なくとも10%、或いはそれを大幅に上回る事が示唆されている。……)」
13. 梁庚堯「南宋城市的發展」『宋代社会經濟史論集』上, 台北, 允晨文化実業股份有限公司 1997年版, 481~583頁
14. ただし梁庚堯の研究を参照したと明記していないものもある。
15. 韓光輝「12至14世紀中国城市的發展」(『中国史研究』1996年第4期)及び呉松弟『中国人口史』第3巻(遼宋金元時期) 588~600頁を参照。韓光輝が扱うのは元代の都市人口データだ

が、集慶、広州、鎮江、嘉興などの事例には南宋期の状況が反映されている様である。

16. 典型的な例として、南宋の『臨汀志』に記載される人口データが挙げられる(『永樂大典』(残本)巻7890, 中華書局 1959年影印本 第86冊, 11B頁~)。これによれば汀州の戸数は南宋初期で15万331戸、以後増加して宝祐年間(1253-1258)には22万3433戸に至る。その間郷村部の戸数の増加率は5割に満たず、一方坊郭戸の増加率は14倍にも至っている。つまりこの百年ばかりの間に汀州の都市人口は激増したが、それに比べて郷村部の人口増加率はほとんど無視できるほどでしかなかったことになる。これは常識的に考えてあり得ない様に思われる。梁庚堯はこれが「南宋初めの時点で汀州の農村の人口許容量が限界近くに達していたために増加した人口は都市に流入せざるを得なかった、という事を説明している」と言う(前引梁庚堯「南宋城市的發展」525頁)。ただ筆者としては、統計データの背後に隠れた情報についての一層の理解、とりわけその年の汀州での郷村戸と坊郭戸の統計方法についてのそれが必要である様に思う。この史料の本当の内容が明らかとなるまでは、直接史実として用いるべきではなかろう。
17. 劉敞『彭城集』巻3 雪中退朝与諸同舍登秘閣, 文淵閣四庫全書
18. 脱脱『宋史』巻93 河渠志3, 中華書局 1977年点校本
19. 呂祖謙編『宋文鑑』巻2, 中華書局 1992年点校本
20. 程顥『河南程氏文集』巻1 論十事筍子, 中華書局 1981年点校本(『二程集』第2冊)
21. 劉敞『彭城集』巻32 開封府南司判官題名記, 文淵閣四庫全書
22. 莊綽『鷄肋編』巻中 石炭, 中華書局 1983年点校本
23. 屈守元, 常思春主編『韓愈全集校注』第2冊 詩 疑年詩 出門, 四川大学出版社 1996年版
24. 元稹『元稹集』第3 遺興十首(2), 文淵閣四庫全書
25. 賈島『長江集新校』巻1 望山, 上海古籍出版社 1983年版
26. 張耒『張右史文集』巻32 依韵和晁十七落花二首(1), 四部叢刊
27. 李呂『澹軒集』巻1 滄海行, 文淵閣四庫全書
28. 劉敞『公是集』巻9 煌煌京洛行, 文淵閣四庫全書
29. 樓鑰『攻媿集』巻7 糧料院葵向亭, 四部叢刊
30. 程公許『滄洲塵尾編』巻3 游靈隱寺, 文淵閣四庫全書
(訳者注：引用部分の原文は「京華百万家, 艤艦瓦置鱗」。訳文は包偉民『宋代城市研究』(中華書局 2014)によった。)
31. 趙善括『応齋雜著』巻6 水調歌頭(趙水生日), 豫章叢書
32. 司馬光『温国文正司馬公文集』巻13 看花四絶句(3), 四部叢刊
33. 趙鼎臣『竹隱畸士集』巻2 乙未寒食前一日陪姚季一吳和甫登崇德寺閣賦詩以駕言出游以写我憂為韻分得我出二字(2), 文淵閣四庫全書
34. 孫心時『燭湖集』巻20 和李季章校書西湖即事三首(1), 文淵閣四庫全書
35. 俞德隣『佩韋齋集』巻3 連雨独坐旅樓有作, 天祿琳琅叢書
36. 周宝珠『宋代東京研究』第9章第2節 345~349頁を参照。周氏の計算によれば、北宋東京の人口は最大で150万人ほどで、戸数は約13.7万戸。ただこれには民戸の他に宦官や軍兵などの人員が含まれている。仮に1戸5口で計算するなら、おおよそ30万戸となる。
37. 包偉民「試論宋代城市發展中的新問題」韓国『中国史研究』第40輯, 2006年2月
38. 梅堯臣『宛陵先生集』巻54 寄題知儀州太保蒲中書齋, 四部叢刊
39. 鄭獬『鄖溪集』巻25 荊江大雪, 文淵閣四庫全書
40. 例えば梅堯臣『宛陵先生集』巻18 送周諫議知襄陽「藹藹荊州幾万家, 竟持壺酒望高牙。」, 四部叢刊

41. 夏竦『文莊集』卷34 滕王閣，文淵閣四庫全書
42. 文同『丹淵集』卷4 送馮允南倅梓，四部叢刊
43. 孔延之『會稽掇英總集』卷19 新修城記（毛維瞻），文淵閣四庫全書
44. 程俱『北山小集』卷5 越州置酒暮夜乃歸作詩一首，四部叢刊統編
（訳者注：四部叢刊統編には「九日塊坐無聊越州使君李野舍人見過敝廬會方回承議亦至因遊章公山林登覽甚適越州置酒暮夜乃歸作詩一首」とある。）
45. 李昌審『中国行政区划通史・宋西夏卷』，復旦大学出版社 2007年版，65頁を参照。
46. 李華『李遐叔文集』卷3 杭州刺史厅壁記，文淵閣四庫全書
47. 歐陽脩『歐陽文忠公集』卷40 居士集卷第40 有美堂記，四部叢刊
48. 宋祁『景文集』卷62 張尚書行狀，文淵閣四庫全書
49. 蘇軾『蘇軾文集』卷30 論葉温叟分擘度牒不公狀，中華書局 1986年点校本
（訳者注：引用部分は「切縁杭州城内，生齒不可勝數，約計四五十万人。」とある。）
50. 趙汴『清獻集』卷4 次韻歲暮有感，文淵閣四庫全書
51. 蘇軾『蘇軾詩集』卷47 病后醉中，中華書局 1982年点校本
52. 郭祥正『青山集』卷2 錢塘行送別簽判李太博（獻甫），密韻樓影宋刊本
53. 孫觀『鴻慶居士集』卷22 平江府楓橋普明禪院興造記，常州先哲遺書。孫觀の引用する白居易の詩句は、『白氏長慶集』卷21 九日宴集醉題郡樓兼呈周殷二判官 にある。
（訳者注：「至四十三万家」について、底本の『史学月刊』2010年第1期掲載論文には「至四十五万家」とある。史料及び『宋代城市研究』314頁によって訂正した。）
54. 梁庚堯「宋元時代の蘇州」『宋代社会経済史論集』上，台北，允晨文化実業股份有限公司 1997年版
55. 范仲淹『范文正公集』卷4 蘇州十咏 虎丘山，四部叢刊
56. 王洋『東牟集』卷6 僧求詩往平江，文淵閣四庫全書
57. 趙蕃『淳熙稿』卷2 平江尋吳恭叔不獲，文淵閣四庫全書
58. 陸游『劍南詩稿』卷8 登城，中華書局 1976年点校本（『陸游集』第1冊）
59. 陸游『劍南詩稿』卷9 晚登子城，中華書局 1976年点校本（『陸游集』第1冊）
60. 姜夔『白石道人詩集』卷上 春日書懷四首（4），四部叢刊
61. 戴復古『石屏詩集』卷1 鄂州南樓，四部叢刊統編
62. 王之望『漢濱集』卷1 贈襄陽帥吳彥猷，文淵閣四庫全書
63. 宋祁『景文集』卷12 渡湘江，文淵閣四庫全書
64. 李綱『梁溪先生文集』卷29 初入潭州二首（2），道光刊本
65. 包拯撰，楊國宜整理『包拯集編年校補』卷1 彈王逵（第七集），黃山出版社 1989年校補本
66. 梁庚堯「南宋城市的發展」『宋代社会経済史論集』上，台北，允晨文化実業股份有限公司 1997年版，511頁
67. 俞希魯『至順鎮江志』卷3 戸口 原注の引く『嘉定志』には「府城廂戸一万四千三百，口五万六千八百。江口鎮戸一千六百，口六千九百。」とある。江蘇古籍出版社 1999年点校本
68. 劉宰『漫塘文集』卷2 寄范黃中（炎）運管，嘉業堂叢書
69. 韓淲『澗泉集』卷15 南台，文淵閣四庫全書
70. 黃幹『勉齋先生黃文肅公文集』卷1 詩 遊鼓山登大頂峰，北京圖書館古籍珍本叢刊 影印元刊本
71. 楊万里『誠齋集』卷74 山月亭記，四部叢刊
72. 汪藻『浮溪集』卷29 題葉尚書普光明庵，四部叢刊
73. 李頻『梨嶽集』宣州獻從叔大夫，文淵閣四庫全書
74. 劉敞『公是集』卷26 寄上濠州舅氏，文淵閣四庫全書
75. 范純仁『范忠宣公文集』卷4 題河中府名閭堂，宋集珍本叢刊 第15冊 影印元刻明修本，線裝書局 2004年
76. 晁公邁『新刊嵩山居士文全集』卷32 小東 黎彭山 二，宋集珍本叢刊第45冊 影印清鈔本，線裝書局 2004年
77. 祝穆『方輿勝覽』卷4 常州，中華書局 2003年点校本
78. 樓鑰『攻媿集』卷3 寄題台州倅亭雲壑図，四部叢刊
79. 徐碩『至元嘉禾志』卷1 沿革，宋元方志叢刊第5冊 影印道光十九年刻本，中華書局 1990年版
（訳者注：四庫本に有り。宋元方志叢刊には「民物稍蕃庶」とのみある。）
80. 王禹偁『小畜集』卷3 七夕（商州作），四部叢刊
（訳者注：四庫全書『小畜集』に有り。四部叢刊『王黃州小畜集』には見当たらず。）
81. 黃幹『勉齋先生黃文肅公文集』卷8 書7 与李侍郎夢聞書，北京圖書館古籍珍本叢刊 影印元刊本
82. 祝穆『方輿勝覽』卷64 昌州，中華書局 2003年点校本
（訳者注：『方輿勝覽』の引く太守于保『道院記』にあり。）
83. 趙汴『清獻集』卷4 次韻見寄，文淵閣四庫全書
84. 劉攽『彭城集』卷16 送賈士彦延平知光化県，文淵閣四庫全書
85. 李流謙『澹齋集』卷1 送宜孺攝邑古邨，文淵閣四庫全書
86. 王洋『東牟集』卷1 真意堂，文淵閣四庫全書
87. 范浚『范香溪先生文集』卷16 与林樞臬書，四部叢刊統編
88. 林亦之『網山集』卷8 重建龜山塔院，文淵閣四庫全書
89. 劉子翬『屏山集』卷17 過東陽，文淵閣四庫全書
90. 蘇轍『欒城集』卷14 續溪二詠 豁然亭，上海古籍出版社 1987年点校本
91. 葉適『水心先生文集』卷10 漳浦泉聖祖殿記，四部叢刊
92. 王安石『臨川先生文集』卷31 寄沈道原，四部叢刊
93. 韓元吉『南澗甲乙稿』卷1 送趙任卿兼湖丞，文淵閣四庫全書
94. 傅宗文『宋代草市鎮研究』第3章第3節 市民類型（福建人民出版社 1988年版，178～197頁）は，草市鎮の住民を一樣に「市民」としている。また陳国燦「宋代太湖流域農村城市化現象探析」（『史学月刊』2001年第3期，132～137頁）も南宋太湖流域の市鎮の人口の属性を同様にしており，南宋期の「太湖流域農村の都市化率は10%前後にも達していた」とする。
（訳者注：陳国燦「宋代太湖流域農村城市化現象探析」136-137頁「由此可以推断，南宋时期在太湖地区除州府城外的近90万户人口中，县城及市镇人口约有近9万户。这就是说，从人口结构的角度讲，此期太湖流域的农村城市化率已达到10%左右。」）
95. 吳潜『宋時進左丞相許国公奏議』卷3 奏禁私置团場以培植本根消弭盜賊，統修四庫全書
96. 以上全て陳訓正等纂『鄞縣通志』輿地志 辛編 村落，成文出版社有限公司 中国方志叢書 1935年鉛印本，545頁から引用。
97. 包偉民主編『江南市鎮及其近代命運』第7章，知識出版社 1998年版
98. 梁克家『淳熙三山志』卷19 兵防類2 松林巡檢（今福清），宋元方志叢刊第8冊 影印崇禎十一年刻本，中華書局 1990年版
99. 『宋会要輯稿』職官 48-140，慶元四年三月十八日の条
100. 薛季宣『良齋先生薛常州浪語集』卷26 上諸司論金牛置尉筭子，宋集珍本叢刊第61冊 影印清鈔本，線裝書局 2004年
101. 洪邁『夷堅三志』壬卷 第9 古歩王屠，中華書局 1981年点校本
102. 佚名『壽昌乘』鎮，宋元方志叢刊第8冊 影印光緒二十三年武昌柯氏息園刻本，中華書局 1990年版
103. 劉宰『漫塘文集』卷2 送邵監酒兼東儀真趙法曹呈潘使君（1），嘉業堂叢書
104. 謝枋得『疊山集』卷7 寧庵記，四部叢刊統編
105. 周紫芝『太倉稊米集』卷13 夜宿長林明日游仙壇宮，文淵閣四庫全書